

寂恵の古典書写をめぐって ―筆跡と本文―

舟 見 一 哉

一、本稿の目的

宗尊親王歌壇における和歌所衆の一人であった寂恵（俗名安倍範元、順教房）については、人物伝の考証が久保田²⁾を嚆矢として進められ、彼の生涯や歌壇における活動などについてほぼ明らかとなってきた。また、『古今集』等の伝本研究においても、寂恵が書写した所謂「寂恵本」に基づいて、彼の書写活動について論じられることがあり、近年では古筆切研究の立場から、寂恵が精力的に古典を書写していたことが具体的な資料に基づいて指摘されるようになってきた。

稿者も拙稿³⁾のなかで、寂恵筆とされる典籍類の筆跡と、寂恵筆とされる古筆切の筆跡との関係について触れたことがある。しかしその後、東京大学史料編纂所一般共同研究「『隠心帖』を中心とする古筆手鑑の史料学的研究」に参画し、寂恵筆とされる古筆切を多数実見する機会を得、拙稿の一部に修正が必要であると考えるに至った。そこで本稿にて修正を加えつつ、寂恵筆とされる典籍と古筆切の筆跡について改めて総合的に分析することにする。そして、寂恵の古典書写の全体像を把握したうえで、寂恵の関わった写本群を本文研究に活用する術についても模索してみたいと思う。

二、寂恵筆典籍の筆跡と書写体制

寂恵の真筆本としてひろく認知されている典籍は二つある。上帖が宮内庁書陵部蔵、下帖が個人蔵の『古今和歌集』（『国文学秘籍叢刊』として複製刊行、弘安本『古今集』と略称する）と、実践女子大学図書館山岸文庫蔵『拾遺和歌集』（複製日本古典文学館）として複製刊行、山岸文庫本『拾遺集』と略称する）である。この二つが寂恵の筆跡を考察するうえで基準とされてきているが、なお検討すべき点が残されていると思われるので最初に触れておく。

まず、弘安本『古今集』について。上帖には次の奥書がある【図版1、2】。なお下帖奥書は虫損のため殆ど読めない（引用は複製本に依る。内容により私にA、B、C…と区分する。改行を「/」で示す。以下同）。

A 古今一部順教御房に／こまかによみきかせ／まいらせ／候ぬ／
（花押）（改丁）

B 弘安元年十一月上旬／以証本書写訖 桑門寂恵

C 此集読授英倫訖（花押）

Aは花押の主某が「順教御房」＝寂恵へ『古今集』の説を伝授したこと

を証した一文。本文ともB・Cとも別筆で、花押の主の自筆とされている（諸説あるが為氏とみる説が有力）。Bは署名があることから寂恵真筆の奥書とされている。このBが本文と同筆であること、そして「以証本書写訖」と書かれていることから、この『古今集』は弘安元年（三七〇）に寂恵が書写した真筆本であるとされている。Cは「英倫」へ伝授しおえたことを記すもので、Bと同じく寂恵筆とされる。「英倫は書陵部壬生本『医陰系図』所収「安倍氏系図」が寂恵の子として挙げる「……」

である（『陰陽道関係史料』汲古書院、2001）。書写後、時期は不明ながら、当該本をもって伝授したことを書き加えた寂恵の伝授奥書であるため、同じ寂恵筆ではあるがBとは墨色や筆勢が異なるとされている。拙稿²⁰¹⁴では、Cのみが寂恵が後から書き加えた伝授奥書であり、Bと本文は寂恵の真筆ではない、言い換えれば弘安本『古今集』は寂恵の令写本であろうと考えた。その根拠は、Bが書写奥書ならば署名の下に花押がないことは不審であることと、寂恵筆とされる山岸文庫蔵『拾遺集』と筆跡が異なるようにみえることであった。しかし、署名の下に必ず花押を書くとは限らないように、弘安本『古今集』と同筆と認められる、某年三月廿一日付の寂恵書状（東京大学史料編纂所架蔵台紙付写真「岡崎範光（寂恵）自筆書状」〔779-10299・保阪潤治氏持参、昭和九年七月／819-10095・里見忠三郎氏所蔵、昭和八年十二月〕【図版3】）の存在を知り、本文の筆跡を寂恵筆ではないと確言するのは難しいように思われてきた。よって私見を改め、弘安本『古今集』は寂恵の真筆本とみておくことにしたい。山岸文庫本『拾遺集』の筆跡と異なるように見える理由については後述する。

つぎに山岸文庫本『拾遺集』について。当該本は卷十までの零本ながら、卷十卷末に次の奥書がある（引用は原本に依る。私に読点を付す、

以下同）【図版4、5】。

A この集順教御房にこまかに／よみきかせまいらせ候ぬ 判（改丁）
B 斯集雖有一部書写之志、老病／右筆不合期之間、上帖之内第一第
／第二十等染愚筆、其外所用他／筆也、但於其說者傳受之分無
所残所奉授糟屋賢郎也／桑門寂恵（花押）

Aは弘安本『古今集』奥書のA奥書とほぼ同じで、某人が寂恵へ『拾遺集』の説を伝授したことを証した一文を、B奥書筆者が写したものを。Bは「糟屋賢郎」なる者へ『拾遺集』の証本と説を伝授したことを記す寂恵の奥書である。注目したいのはBの前半部で、「老病」によって全巻を書写することが叶わなかったため、卷一・二・十は寂恵自身が書写し、他の巻は「他筆」に書写させたところ。たしかに卷一・二・十・奥書と、その他の巻の筆跡は明らかに異なる【図版6、7】。当該本を实地調査したところ、Bは寂恵筆の書写奥書と認められるので、奥書という通り、卷一・二・十・奥書の筆跡は寂恵の真筆と断定できる。

山岸文庫本『拾遺集』には三つの問題点がある。問題点その一。山岸文庫本『拾遺集』のうち寂恵筆である卷一・二・十・奥書の筆跡が、寂恵筆と認められている弘安本『古今集』の筆跡とは異なるように見える。【図版1、2】と【図版4、5】【図版6、7】とを見比べて頂きたい。

弘安本『古今集』はいくぶん細い線の大ぶりの文字で、世尊寺流の書風が色濃いものであるのに対して（東京都立中央図書館蔵『古筆流儀別』などは寂恵を世尊寺流に分類している）、山岸文庫本『拾遺集』は一字が小ぶりで、筆線は肉厚、濃墨の線が目立ち、世尊寺流の書風からは離れている。両者を並べるとかなり印象が異なるのである。では別筆なのかというと、頻出する文字、たとえば「題しらず」「よみ人しらず」や、

「藤原」「朝臣」「法師」といった歌人名表記などを見比べると、両者は同一筆跡と認めざるをえない。これまで別筆説は出されていらないが、同一筆跡だとしても両者の印象が大きく異なることはひろく認められると思うので、その理由を考えておきたい。

山岸文庫本『拾遺集』の奥書によると、寂恵はこのとき「老病」ゆえ全帖の書写が困難であったという。たしかに筆跡には震えが散見される。奥書に書写年時は明記されていないが、老病というのだから老齢期の書写であろう。寂恵は生没年未詳であるので老齢期がいつか特定はできないが、『寂恵法師歌語』と仮称されている逸名歌論書（奈良女子大学附属図書館・水戸彰考館蔵）から、次のように推定することはできる。『寂恵法師歌語』は「正和みつのとし秋の半の空……」と書き出し、自身の閨歴を回想する文章を書いているので、正和三年（三三四）には存命で、過去を回想するような年齢であったことが知られる。また『吾妻鏡』などによると、在俗時の弘長元年（三三二）頃、寂恵は宗尊親王歌壇において活躍しており、それは早くとも二十代以降の事績と推される。以上を合わせ考え、正和年間はおそらく七、八十代であったらうと推定されている（井上1987）。そこから逆算すると、弘安本『古今集』を書写した弘安元年（三三〇）、寂恵は三十〜四十代であったことになる。山岸文庫本『拾遺集』は、老病といえる時の書写であるから、弘安元年よりまだいぶ後の書写、正和に近い頃の書写であろう。

つまり、山岸文庫本『拾遺集』と弘安本『古今集』の書写年時には隔たりがある。両書の筆跡が同一筆跡とは認められながらも、全体の印象が異なる要因はここにあるのではないか。寂恵の筆跡は加齢に伴って変化が生じたのではないかと考えられる（俊成や定家の筆跡変化の例などを想起されたい）。大別すれば、弘安本『古今集』のような〈前期筆跡〉と、山岸文庫本『拾遺集』の真筆部分のような〈後期筆跡〉とに区別で

きよう。

問題点その二。山岸文庫本『拾遺集』において「他筆」が書写した巻の筆跡が、弘安本『古今集』の筆跡と極めてよく似通っており、類出す「題しらず」「よみ人しらず」や歌人名などを見比べると同筆かと思われるほどである。前掲【図版1】と【図版6】を見比べて頂きたい。もし奥書がなく、「他筆」部分だけが古筆切になっていれば、伝寂恵筆として通用してもおかしくない。この「他筆」が誰なのか特定はできないが、分担書写を任せるほどの人物であるから、寂恵の血縁者といった新しい間柄の人物であろう。近親者の筆跡が似通うことは冷泉家時雨亭文庫に残されている品々から知られ、また（血縁者でなくとも）師弟は基本的には同じ書流に属し、弟子は師匠の書写した本を用いて学ぶことになるため筆跡は似通うといわれる。『拾遺集』の他筆もその類いであろうと推定される。寂恵周辺には、寂恵の〈前期筆跡〉と似通う筆跡を扱う者がおり、書写を手伝っていたのである。

問題点その三。弘安本『古今集』のC奥書にある花押と、山岸文庫本『拾遺集』の寂恵花押が相違している（前掲【図版2】と【図版5】）。この点はすでに阿部・前田2008に言及がある。今回、当該本を実地調査したところ、たしかに山岸文庫本『拾遺集』の花押は、弘安本『古今集』の花押に、少なくとも横線一本と弧線一本が加えられた形をしている。加筆部分はすべて他の箇所よりも墨色が淡く震えが目立つ。山岸文庫本『拾遺集』の花押へ加筆された理由は判然としない。

ここまで、寂恵の真筆本としてひろく認知されている典籍二つの筆跡について、両者を比較して指摘されることが従来なかったようなので、細部にも拘って確認してきた。その結果、（一）弘安本『古今集』と、山岸文庫本『拾遺集』の巻一・二・十・奥書は、寂恵の真筆と認められること、（二）寂恵の筆跡は加齢に伴って変化したと考えられ、弘安本『古

『今集』の如き〈前期筆跡〉と、山岸文庫本『拾遺集』の真筆部分の如き〈後期筆跡〉に大別できること、(三) 寂恵の〈前期筆跡〉と酷似する人物が寂恵の周辺にあり、書写を手伝っていたこと、以上の三点が指摘できる。

では次に、書写の方法についてみていこう。弘安本『古今集』は寂恵自身が全丁を書写しており、山岸文庫本『拾遺集』は周辺の者と分担書写していた。京都大学文学研究科図書館蔵『日本紀歌注』〔国文学―C c II―二〕の本奥書によると、寂恵は他者に命じて全丁を書写させる場合もあったことが知られる（引用は原本に依る）。

○第二末

A 本云、文永十年五月十六日以当黄門〈経俊卿〉本／書写校合畢／正議大夫大常大卿〈在判〉

B 本云、建永二年五月六日以正本書写畢 印稚

右本故順教房子息前天文博士忠顕／朝臣所持也、借請之正慶元年中冬／十余日於相州鎌倉之郡佐介答／蓬屋書写校合畢／譚林隠士桑門暹阿〈于時五十八〉

○第四末

C 書本一 文永十年五月廿九日 校合了／正議大夫〈在判〉

D 本一 建永二年五月三日以正本書写之了

E 又云 弘安七年仲春之候令詠書心性房了、一校了 寂恵

F 于時正慶元年霜月中之三日以右本言写了／暹阿

○第八末

G 本云 弘安七年春令詠書心性房了／寂恵

H 正慶元年仲冬十余日以右本／書写校合畢 暹阿

当該本は川上[2009]の紹介した一本で、焼失した東京帝国大学国語研究室蔵本を焼失以前に転写した本である。文永十年に吉田経俊所持本を卜部兼文が書写した本があり（A）、それを建永二年に印稚（諸氏の指摘通り「稚」は誤写であろう）が転写した（B）。第四・八末の奥書によると、寂恵はその本を弘安七年（三六四）に「心性房」なる人物（伝未詳、安倍氏系図にみえず）に詠えて書写させている（E・G）。またその寂恵令写本は寂恵の子息忠顕に伝領されていたことも知られる（B）。なおF・Hの暹阿は伝未詳である。E・Gの弘安七年は、弘安本『古今集』を書写したわずか七年後であるから、おそくとも四十代後半から五十代前半頃にあたる。寂恵は、老齢や老病ではない場合であっても、他者に命じて全丁を書写させていたことが確認できる。

寂恵の書写活動は、年齢とは無関係に、三種の方法——全丁自筆、分担書写、令写、でもって行われており、寂恵類筆ともいえるべき筆跡の似通う者によって一部が支えられていたのであった。かようなある種の組織的書写といえば、俊成や定家といった歌道家の例が思い起こされる。勅撰集撰者を代々輩出する家たりうるために、勅撰集を撰集する際の資料となる歌集類を収集書写した彼らは、たとえば定家の場合、巻頭を定家が書写して残りを周辺の者に書写させたり、全体を書写させた後に定家が校閲するといった、いわゆる「監督書写」という体制をとっていた（『冷泉家時雨亭叢書 第一七卷 平安私家集四』解題や岸本[2013]などを参照されたい）。俊成も同様であったことは田中[2000]などの指摘するところである。多数の歌書類を収集し所持しておくための体制として、監督書写、令写という方策は優れており、歌道家においてそれが採用されていることは極めて自然である。しかしながら、寂恵は、勅撰集撰者を輩出する歌道家の者ではなく、重代の歌人でもない。歌才をもって宗尊親王歌壇において信頼を得ていたとはいえ、一介の歌人、陰陽師であ

る。ゆえにこのあり様を、寂恵というパーソナリティの特異性と捉えるか、当時の鎌倉という地域性の問題と捉えるか、あるいは時代性へと拡大して一般の現象であったと捉えるか、いまは妙案がない。寂恵が撰集したとされる『澗山集』（散佚、『新浜木綿集』序にみえる）、『春葉抄』（散佚、彰考館徳川博物館蔵『本朝書籍目録』などに名がみえる、久保木2009参照）の編纂とも関わるうかとも予想されるが、いまは三種の体制でもって古典書写が行われていた事実を認めるに留めておきたい。

三、寂恵筆と目される古筆切の筆跡

ここまで確認してきた寂恵の書写活動の実態は、寂恵筆とされる古筆切や、寂恵を伝承筆者とする一連の古筆切について考えるとき、新たな知見を与えてくれそうである。

寂恵を伝承筆者とする古筆切は頗る多く残されている。そのなかには寂恵筆と認定されているものがあるが、いずれも奥書部分は未発見であり、よって筆跡の近似性、とくに弘安本『古今集』や後述する石見切と似ていることから寂恵筆と認められてきている。しかしながら、いま確認したように、寂恵の周辺には書写を手助けする者がおり、そのなかには、弘安本『古今集』の筆跡と酷似する者がいた。ということは、これまで寂恵筆とされてきた古筆切のなかには、実は寂恵ではなく、彼の周辺の者が書写したものが含まれているのではないかと疑われてこよう。以下、作品ごとに検討していく。

▼三・1 石見切

名物切として夙に知られる『古今集』の断簡である。古来より寂恵真筆とされ、否定的な見解は見当たらない。小林2000・川上2003の指摘するように、石見切とよばれる断簡のなかには、内容が重複する部分や、

重複が予想される箇所が三箇所あるので、石見切とよばれる断簡には少なくとも二本の『古今集』から切り出されたものが混在している。書誌的特徴も二種あり、字高が高く、化粧断ちされている可能性を考慮しても紙面余白が少ないものと、字高が低く、文字が小さいために行間や余白が広いものがある。石見切は種々の行間書き入れがあることを特徴とするが、書き入れの有無によっても分別できそうである。問題の筆跡は、『古筆学大成』に収録されている断簡に限れば、いずれも寂恵筆と認めてよからう。ただし、年代の異なる筆跡が混在しているようで、〈前期筆跡〉により近いものと、〈後期筆跡〉に近いものがある。【図版8】は〈後期筆跡〉に近いと判断される鶴見大学図書館蔵手鑑 [7288/K] 所収の一葉。

▼三・2 後撰集切

『古筆学大成』（以下「大成」）には、寂恵を伝承筆者とする後撰集切が二種掲載されており、その後もツレが紹介されている。「伝寂恵筆後撰和歌集切（一）」は、一面九行書、法量縦三・五九×横二・六四（最大）、字高九・六〇前後で、上下余白が広い。筆跡は〈後期筆跡〉と同筆とみてよいと判断する。【図版9】は金刀比羅宮蔵手鑑『古今筆陳』『宝書81』所収の一葉（縦三・七〇×横二・五四）。なお、これと同筆ながら書誌的特徴が異なるものが古筆手鑑『かたばみ帖』に一葉ある（一面十一行書、一紙縦二・四四×横二・五八、字高一・八二）。

「伝寂恵筆後撰和歌集切（二）」はこれとは別種である。一面十行書、縦三・四四×横二・六二（最大）、字高九・四四内外で、上下余白がすべて（一）よりも狭い。『大成』は「寂恵の筆跡に一脈間通ずるものがある」けれども寂恵筆ではないとするが、『国文学古筆切入門』、『平成新修古筆資料集 第二集』、『同 第三集』は寂恵の真筆とみている。私見では、（一）

とは別筆で、山岸文庫本『拾遺集』の他筆部分と最も似通うため、寂恵周辺の者による書写である可能性が高いと判断する。【図版10】は林原美術館蔵手鑑『日本古筆手鑑』所収の一葉（縦三・九×横二・五八糎、字高一・九糎）。

▼三・3 金葉集切

『大成』には寂恵を伝承筆者とする金葉集切が二種掲載されている。『伝寂恵筆金葉和歌集切（一）』は、個人蔵手鑑『古筆帖』所収で、一面十行書、縦三・七×横五・四糎、字高三・二糎。ツレとして『古筆切影印解説』所収の第一図と第二図がある。『大成』は弘安本『古今集』と同筆とし、同時期の書写本とみているが、稿者には弘安本『古今集』に似通う点は見いだせない。かといって（後期筆跡）とも相違しており、山岸文庫本『拾遺集』の他筆部分とも別筆であるので、寂恵とは無関係と思われる。

一方の『伝寂恵筆金葉和歌集切（二）』は、永青文庫蔵手鑑『墨叢』所収で、一面十行書、縦三・九×横四・六糎、字高一・三糎。ツレとして『古筆切影印解説Ⅱ』に「伝日野俊光筆四半本」として掲載されているものが挙げられる（現在はお茶の水女子大学附属図書館蔵）。『大成』解説は「前の『⑩伝寂恵筆 金葉集切（一）』とは、別のもの、当然ながら、手も異なる。前者は、さきの考証のとおり、寂恵の自筆にまぎれもないもの。だが、これは筆跡が、一見、精彩を欠くので、あるいは模写本ではなかろうか」とするが、ツレを合わせ見ると、むしろこちらのほうが寂恵の筆跡に近い。真筆とは考えられず、おそらくこれも寂恵周辺の者による書写と思われるが、後撰集切とはやや筆致が違うように見える。

【図版11】はお茶の水女子大学附属図書館蔵の一葉（[911.13[K148]、縦三・七×横二・五四糎、字高一・八五糎）。

▼三・4 その他

その他の歌書の断簡は、筆跡が一種類しか見当たらないので、ここにまとめて示す。

まず千載集切は、『大成』、『平成新修古筆資料集 第二集』、小島2006に一葉ずつ紹介されている。諸氏の指摘する通り、これは寂恵真筆とみてよく、とくに（後期筆跡）に近い。

次に続古今集切。『大成』、『国文学古筆切入門』、『平成新修古筆資料集 第一集』、『同 四集』、日比野2009などに紹介されている。『大成』解説では寂恵自筆ではないとするが、他は石見切や弘安本『古今集』と同筆とする。私見では（後期筆跡）により近いと判断する。

次に続拾遺集切。日比野2009に紹介された一葉が知られる。（前期筆跡）に近いかと思われる。

次に石間集切。『国文学古筆切入門』に紹介された一葉のみが知られる。「この切が老年ではなく、弘安元年（二七）書写の寂恵本古今集の筆致と年代的にも近い」と指摘されるとおり、（前期筆跡）に近い筆跡である。次に時代不同歌合切。和歌文学会ホームページに紹介されている一葉で、紹介者の久保木秀夫の指摘通り山岸文庫本『拾遺集』と同筆とみられる。（後期筆跡）と判断される。

最後に、拙稿2014で取り上げた、日野俊光を伝承筆者とする『後拾遺集』の断簡「千種切」をここに加えたい。寂恵との伝承筆者はないものの、寂恵の筆跡に一脈通じるものであることが『大成』等で指摘されているものである（田中2008は伝承通り俊光の自筆とみるが、東寺百合文書の俊光筆史料「き函18号」「こ函47号」などと比較して俊光筆ではないと判断する）。たしかに（前期筆跡）に似通うもので、「伝寂恵筆後撰和歌集切（二）」と同筆の、寂恵周辺の者による書写である可能性が高いと判断する。【口絵1】は個人蔵手鑑『隠心帖』所収の一葉（縦二・四五

×横二・三種、楮打紙。『大成』が11として掲載するもの。【口絵2】は拙稿2011以降に所在が判明したイエル大学図書館蔵手鑑所収の一葉。なお本稿末尾に管見に及んだ千種切の一覧を付した。

その他、寂恵を伝承筆者とする『新古今集』『伊勢物語』『和歌知頭集』『頭注密勘』なども紹介されているが、いずれも寂恵の筆跡とも、周辺の者の筆跡とも認めがたいので対象から除いた（伝良経筆桂切「新古今集切」を寂恵類筆とみる向きもあるようだが、典型的な後京極様の、別筆と判断されるので除く）。

以上みてきたように、「伝寂恵筆後撰和歌集切（一）」、「千載集切、続古今集切、時代不同歌合切は（後期筆跡）」に近い時期の寂恵書写本の断簡とみてよい。そして「伝寂恵筆後撰和歌集切（二）」、「千種切は、寂恵周辺の者による書写である可能性が高いと判断する（分担書写本の一部か、令写本の一部かは、現存する範囲では明らかにしがたい。「伝寂恵筆金葉和歌集切（二）」は留保しておく）。そして「伝寂恵筆金葉和歌集切（一）」を除くその他の断簡は（前期筆跡）」に近い時期の寂恵書写本の断簡と判断される。

右の認定は観点が筆跡であるだけに慎重になるべきではある。しかし、寂恵の書写活動の一端を担う類筆の者がいた事実を重視すると、これらを寂恵の書写活動と無縁として切り捨てることもできないように思われる。そこで本稿では（寂恵関与本）という枠組みを提案したい。真筆である可能性が十分にあり、同様の確度で、分担執筆した写本の一部であったり、寂恵の筆跡と似通う周辺の者が寂恵の命により書写した令写本の一部である可能性もあるので、総じて寂恵が何らかの形で書写に関わった（寂恵関与本）として捉えてみる見方である。これまで寂恵真筆と認められなかった伝寂恵筆の断簡は、それほど注視されることがなかったように思うが、ここで取り上げた伝寂恵筆切に限っては、積極的に寂恵

の関与を想定してみることで、本文研究に活用できるのではないかと考えるわけである。このような姿勢を、たとえば贋作の頗る多い伝定家筆の歌書類に当てはめてしまうことは無謀であろうが、（石見切を除けば）歌人や能書家として後世さして著名であったともいいがたい寂恵であったみれば、何らかの形で寂恵の奥書があったがゆえに伝承筆者となったかとも思われ、ゆえに右のような想定を一度試みようとする次第である。

四、寂恵本の本文とその活用法

では一連の古筆切を本文研究に活用するために、寂恵筆であることが確かな典籍類の、本文の性格について確認しておこう。

弘安本『古今集』は、本奥書はないけれども、配列や本文異同などから、貞応二年定家本を底本として書写し、そこに永治二年清輔本、建久二年俊成本、「師本」、「為本」による校合を施していることが川上2003によって指摘されている。山岸文庫本『拾遺集』も零本ゆえ本奥書はないが、巻四・二二三番歌に「定家卿自筆為相相伝本」による校合が施されており、校合が極めて僅かであることから、系統は不明ながら定家本を写したものであろうと推定されている（北野1984、片桐1970）。

では、真筆本は残されていないが、本奥書に寂恵の名のみえる典籍についてみてみよう。まず、建長八年奥書本『古今集』がある（國學院大學蔵本「貴重書一八五一」、翻刻は國學院大學デジタルライブラリーのデジタル画像に依る）。

A 書本云／此集家々所稱……（＝貞応元年定家本奥書）

B 寛元々年十月八日以京極中納言入道自筆之本／書写比較畢、云文字云書様聊不相違書本／所写留也、於当道最可秘達者乎

C 建長四年九月七日 午刻書写畢、後日一校畢

D 建長八年沽洗九日書写校合畢、文字／書様如書本写之、而彼本僻字有其數、／是展転書写之錯歟、猶以証本可校合者也矣 寂恵法師

後日以朱少々有勘付事、極以自由事歟、／早可消之

E 同年七月四日於李部之亭、以越州史之／証本悉以令比較之処、少々有相違事、仍／行數書様文字等任彼本、悉皆直付畢、即加墨点付越本是也

F 又彼奥書詞云……（以下「越州史之証本」の奥書）

底本は貞応元年十一月廿日定家本である。寛元元年に某人が転写し(A)、それを建長四年に某人が転写した本を(B)、建長八年に寂恵が転写している(D)。さらに寂恵は同年七月四日に、「李部」＝源親行の邸宅にて「越州史之証本」(F以下によるとこの北条実時所持の証本とは北条政村所持の定家自筆本を宝治三年に転写し、建長四年に飛鳥井教定所持の為氏筆為家加証奥書本で校合したもの)でもって校合もしている(E)。詳しくは川上1989・同2003を参照されたいが、寂恵はやはり定家本を用いていることが確認できる。

次に早稲田大学図書館蔵『詞花集』[H0106616]がある(翻刻は早稲田大学古典籍総合データベースのデジタル画像に依る)。

A 八代集不交他筆染禿筆内也、／恐可為証本耳、／永正(丁

丑)之年小春(庚申)之日／前黄門侍郎藤原(在判)

B 本云、／以相伝本書写／校合了／右近中将藤原朝臣／判(為相卿也)

C 本云、／永仁改元之曆初冬／上旬之候、依明融大／徳之命

馳筆畢 桑門寂恵

D 寛永第十一八十以右本卒一校了

井上1987に紹介された一本。BとCは校合奥書で「本云」は青色の筆で書かれている。冷泉為相が相伝本をもつて書写校合した本を底本として、永仁元年に「明融大徳」(『秋風抄』ほかに名がみえる関東の人物)の命で寂恵は書写している。為相相伝本に該当する写本は現存しないが、為相は定家所持本の大部分を相伝していたのだから(この点については拙稿2013に整理した)、寂恵が用いた為相相伝本とは定家本とみて誤るまい。やはりここでも定家本が用いられていると推定される。

『大納言為家集』や『寂恵法師歌語』によると、寂恵は文永八年には為家の邸宅を訪れており、為家が没するまで師事していたことが知られる。また、その子息、為氏とも深く交渉があったことも周知のとおりである(なお冷泉家所蔵『未来記』添状が確かなものであれば、阿仏尼とも交流があったことになる。久保田1958、井上1987、福田1972、冷泉1974、石田1989、田淵2009等参照)。定家本の具体的な流通経緯は判然としないが(弘安本『古今集』のA奥書と山岸文庫本『拾遺集』のA奥書が為氏のものであれば、為氏による説と証本の伝授が主な出所であろう)、定家自筆本ではなくとも、各種の定家本系統の写本に、比較的容易に接しうるところに寂恵はいた。その環境のもと、寂恵は定家本をもつて古典を書写することを常態としていたと考えられるのである。

そうすると、寂恵関与本と想定した一群の古筆切も、(定家存命時に成立した勅撰集にかぎっていえば)定家本を底本としている可能性が高いのではなからうか。例えば後撰集切は、二種とも現存の範囲では定家本と顕著に相違する本文が見いだせないばかりか、勅物に至っては定家本のものとしてよく、定家本が利用された可能性が高い。こういった

事例を広げて考えていけば、現存しない定家本『後拾遺集』や『千載集』の本文は、上記の古筆切から復元できるのではないかと考えられるのである。個別作品の考察については後考を俟つが、寂恵関与本が失われた定家本を復元する資料たりうる可能性は十分にあると考えられ、今後は寂恵筆とされる古筆切群を積極的に分析、活用することを提案したいと思ふ。

五、今後の課題

寂恵の筆跡と書写活動を整理し、三種の筆跡と、三種の書写体制があったことを確認した。そしてそれらを寂恵関与本という枠組みで捉え、本文研究に活用する術を提示してみた。論拠がすべて筆跡認定に関わることに聊かの不安が残る。大方のご教示を賜りたい。

寂恵は、当時権威ある証本として尊重されていた定家本『古今集』を何度も書写している。しかもそれは同じ系統の本ではなく、種々の定家本であった。複数の系統の定家本を校合していた寂恵にとって、定家本の諸本間にある異同はどのように映ったのであろうか。俊成本との校合も細かく行っているが、俊成本と定家本との相違はどのように処理していたのであろうか。そもそも俊成本や清輔本など複数の証本によって校合する態度は、定家本を相対化することにもつながるが、それはいかなる証本観に根ざした行為なのだろうか。繰り返し返された寂恵の書写校合をめぐってはなお考えるべき課題が多い。

また、山岸文庫本『拾遺集』などの奥書から知られる、寂恵による証本や説の伝授とは具体的にどういったものだったのだろうか。そのときに定家本や為家・為氏の言説はどのように働いたのか。はたまた建長八年本『古今集』の奥書から知られる、源親行邸宅における校合作業とはいかなるものだったのか（個人的行為なのか集団的行為なのか、源氏物

語研究との関わりは如何）、等々も考えねばなるまい。寂恵という個人に収まりきらない、当時の鎌倉における古典学といった文化史的観点からの分析が必要である。すべて今後の課題としたい。

付、天理大学附属天理図書館蔵『古今和歌集』について

天理大学附属天理図書館に所蔵される『古今和歌集』のなかに寂恵関与本かと推定される一本がある【図版12】。『國書遺芳』（呉文炳、理想社、1965）、『和歌の時代 古今集そして新古今集』（天理ギャラーリ、2003）に図版が紹介されているもので、書誌は以下の通り（『天理図書館稀書目録和漢書之部 第五』と私見は一部異なる）。

911・23・イ191。綴葉装、二帖、上帖九折、下帖十折、法量縦三・二×横六・三糎、字高六・六糎内外（巻一卷頭歌）、表紙は茶褐色地雲形二重丸鳥獸紋、見返しは金銀切箔銀野毛銀霞で、天一地一の押界あり（界高は上から三七・二・九八、二・七糎、界幅一・八糎）、題簽「古今和歌集」を左肩に貼付、表紙と題簽は後世に誂え直したものであろう。本文用紙は厚手楮紙打紙、朱文印「天理図書館蔵」、下帖第十折第二紙（裏表紙に差し込まれている）に「酒井雅楽殿様（御用）／世尊寺殿定成卿 古今和歌集上下式冊／寛永式歳（乙酉）壬四月廿九日／御本丸 御経師桜井左近（花押）」と墨書、添状一通あり、包紙ウワ書「古今（世尊寺定成卿筆／添状）」、本文「古今和歌集上下／世尊寺殿定成筆／代物之儀不案内御座候へとも／三百貫程可仕候」、下状末尾に嘉禄二年定家本の本文あり、書写奥書なし。

本文系統は、本文や配列、「文室」「正文」と表記されていることなどから、本奥書通り嘉禄二年定家本とみてよからう（為家による仮名序への加筆「あさかやま……」は持たない）。以下のとおり複数の書き入れがある。「1」本文同筆の墨筆にて俊成本との校異を「俊本」として示す。

概して永暦二年本に近く、基俊本との校異本文も保存している（俊成本本文が底本文と一致するときは、基俊本による傍記を片仮名で横に書き、基俊本による傍記と底本文とが一致するときは、俊成本本文を平仮名で横に書くという法則がある）。「2」本文同筆の墨筆で、嘉禄二年定家本の勘物、それとは別の作者勘物、漢字に振り仮名を付す。「3」本文とは別筆かと思われる朱筆にて、上部余白に「万葉集」「猿丸集」「伊」「藤六輔相集」といった他出文献を書き入れ、作者名の下に入集歌数や簡略な勘物を付す。清輔本古今集の勘物を想起させるものだが、仮名序の「ならのみかど」に対して「文武、聖武、平城、有相論」などもあり、全てが一致するわけではない。「4」その他、朱声点、墨筆傍点、本文別筆による注記もある。以上を要するに、当該本は、嘉禄二年定家本を底本として書写したあと、俊成本に依って細かな校合を行った本であり、それが後にも利用され、種々の書き入れがなされたものといえる。

さて、当該本の筆跡について、室町末期頃の添状は世尊寺定成筆と鑑定している（鑑定者については記載がない）。たしかに世尊寺流の筆致とも思われるが、定成自筆書状と比較して同筆とは見なしがたい。むしろ、ここまで見てきた一連の寂恵関与本の筆跡に似通い、とくに弘安本『古今集』の筆跡と酷似する箇所が見られる。定家本を底本とし、俊成本で校合していることも、弘安本『古今集』にみられる寂恵の校合姿勢と同じである（嘉禄二年本であることや疑問もあるが、『後撰集』の場合と同じく、為相関与本あたりを見たすれば解決できるか）。奥書がない以上、寂恵の真筆本とは断言できないけれども、寂恵関与本の一本である可能性があると判断し、また従来その本文についても言及されたことがないので、ここに紹介しておく。

〔引用参考文献〕

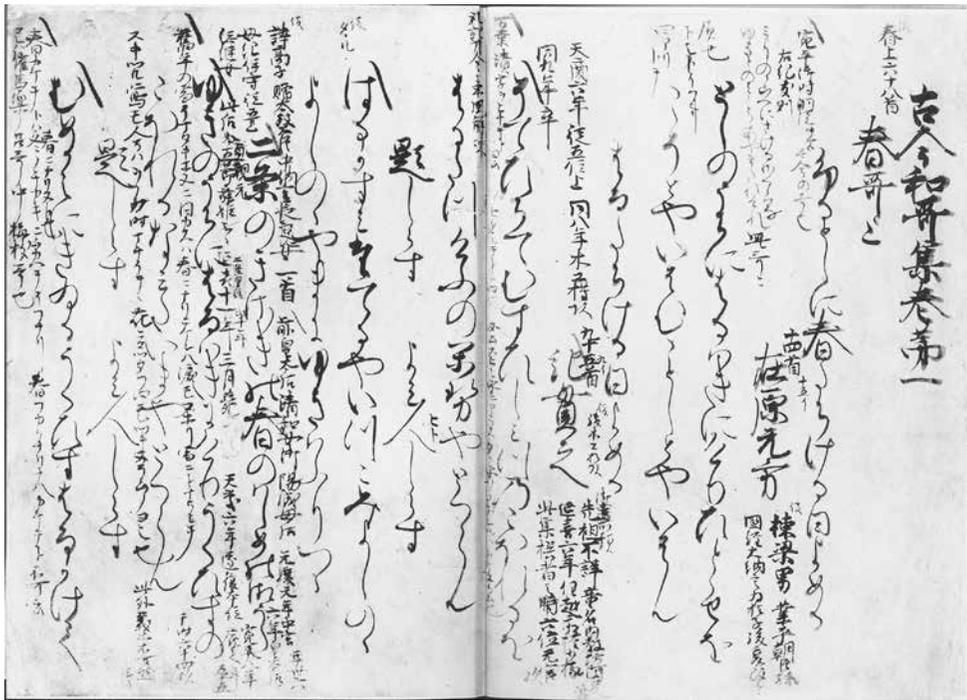
- ・阿部秋生 前田裕子 2008 『寂恵本拾遺和歌集 上 一冊（調査報告一）』 『実践女子大学文芸資料研究所年報』 1
- ・石田吉貞 1969 『藤原定家の研究 改訂版』 文雅堂銀行研究社
- ・井上宗雄 1987 『中世歌壇史の研究 南北朝 改訂新版』 明治書院
- ・片桐洋一 1970 『拾遺和歌集の研究』 大学堂書店
- ・川上新一郎 1999 『六条藤家歌学の研究』 汲古書院
- ・同 2003 『寂恵の古今集研究について』 『斯道文庫論集』 38
- ・岸本理恵 2013 『定家監督書写本私家集の諸相―江帥集・成尋阿闍梨母集殷富門院大輔集・傅大納言母上集・四条宮下野集・相模集』 『尾道市立大学芸術文化学部紀要』 12
- ・北野克 1964 『山岸徳平博士藏寂恵本拾遺集上帖について』 『拾遺集 北野本』 別冊解説、端居書屋
- ・久保木秀夫 2009 『中古中世散佚歌集研究』 青簡舎
- ・久保田淳 1958 『順教房寂恵について』 『国語と国文学』 35-11 ↓ 『中世和歌史の研究』 明治書院、1993
- ・小島孝之 2006 『古筆切で読む くずし字練習帳』 新典社
- ・小林強 2000 『古筆学大成』 4巻及び5巻関係・『古筆学大成』 未所収の主要伝承筆者関係の古今集切一覽稿』 『自讀歌注研究会会誌』 8
- ・田中登 2000 『藤原俊成の私家集書写活動』 『国文学（関西大学）』 81
- ・同 2008 『古筆学より見たる冷泉家所蔵本の意義（続）』 『国文学（関西大学）』 92
- ・田淵句美子 2009 『人物叢書 阿仏尼』 吉川弘文館
- ・日比野浩信 2009 『十三代集の古筆切』 志香須賀文庫所蔵断簡の紹介を兼ねて』 『愛知淑徳大学国語国文』 32
- ・福田秀一 1972 『中世和歌史の研究』 角川書店
- ・冷泉爲臣 1974 『藤原定家全歌集』 国書刊行会
- ・『国文学古筆切入門』 和泉書院、1985
- ・『日本の書と紙 古筆手鑑』 『かたばみ帖』 の世界』 三弥井書院、2012

- ・『平成新修古筆資料集 第一集』思文閣出版、2000
- ・『平成新修古筆資料集 第二集』思文閣出版、2003
- ・『平成新修古筆資料集 第三集』思文閣出版、2006
- ・『平成新修古筆資料集 第四集』思文閣出版、2008
- ・『古筆切影印解説Ⅱ 六勅撰集編』風間書房、1996
- ・和歌文学会ホームページ「伝寂恵筆『時代不同歌合』断簡」<http://wakabun.jp/konkigazo%20kako%20gazou-jakue.htm>(最終閲覧日：2015年7月31日)
- ・拙稿 2013 「冷泉家・二条家における証本とその利用法」『生活と文化の歴史学3 富裕と貧困』竹林舎
- ・拙稿 2014 「清輔本・定家本『後拾遺和歌集』の復元試論」『和歌文学研究』108

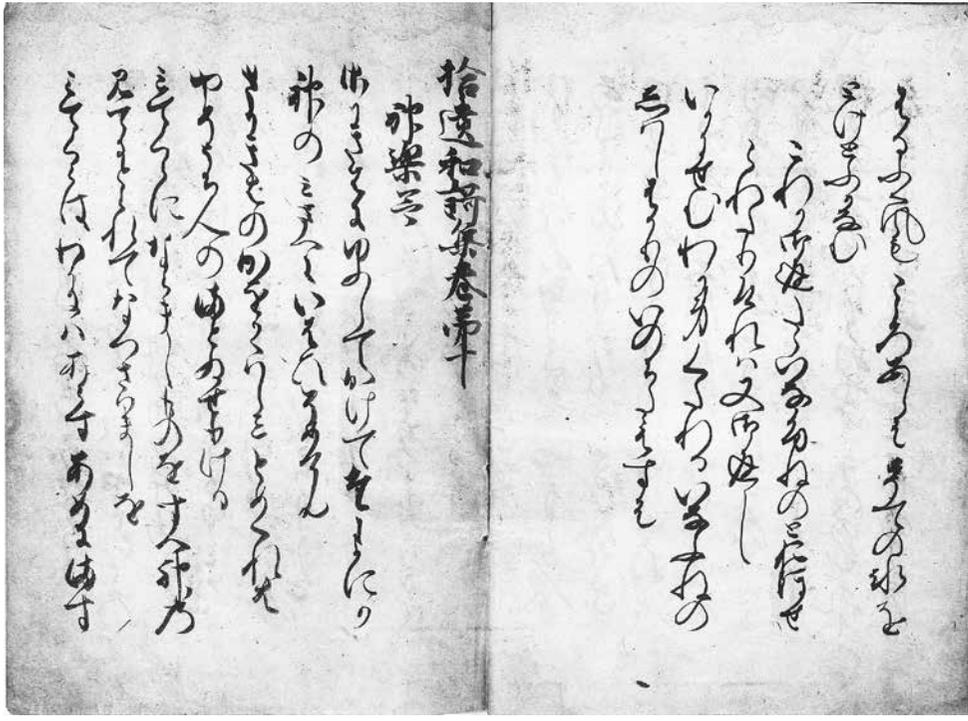
〔付記〕資料の閲覧および図版掲載・転載に際してご高配いただいた諸機関及び関係者の方々に深謝申し上げます。本稿は二〇一五年度東京大学史料編纂所一般共同研究「隠心帖」を中心とする古筆手鑑の史料学的研究」(研究代表者・久保木秀夫)に基づく研究成果の一部である。

【伝日野俊光筆千種切 現存一覧】

1	個人蔵手鑑『百千鳥』(=『古筆学大成』1)	387~389
2	根津美術館蔵四号手鑑(=大成2)	446~448
3	個人蔵手鑑(=大成11)	461~462
4	五島美術館蔵『毫戦筆陣』(=大成12)	465~466
5	個人蔵手鑑 [東京大学史料編纂所レクテグラフ6800-47](保阪潤治氏所蔵)	483~485
6	イエール大学蔵手鑑	485~487
7	徳川黎明会蔵『玉海』(=大成9)	496~497
8	梅沢記念館蔵『あけほの』(=大成3)	504~505
9	小林強氏蔵 (国文学研究資料館・日本古典資料調査DB)	505~508
10	『続国文学古筆切入門』	508~510
11	出光美術館蔵『見ぬ世の友』(=大成4)	534~535
12	東京国立博物館『藻塩草』(=大成5)	536
13	『古筆切影印解説Ⅱ』14図	537
14	三井文庫蔵『高松帖』	545~547
15	所在未詳(=大成補遺45)	549~551
16	『第三回 趣味の茶掛展目録(福山天満屋)』	554~556
17	個人蔵手鑑『旧錦囊』(=大成6)	559~560
18	根津美術館蔵『文彩帖』(=大成7)	570~571
19	徳川黎明会蔵『八雲』	581~582
20	『慶安手鑑』	582~583
21	個人蔵手鑑(=大成8)	592~593
22	個人蔵手鑑(=大成10)	594~595



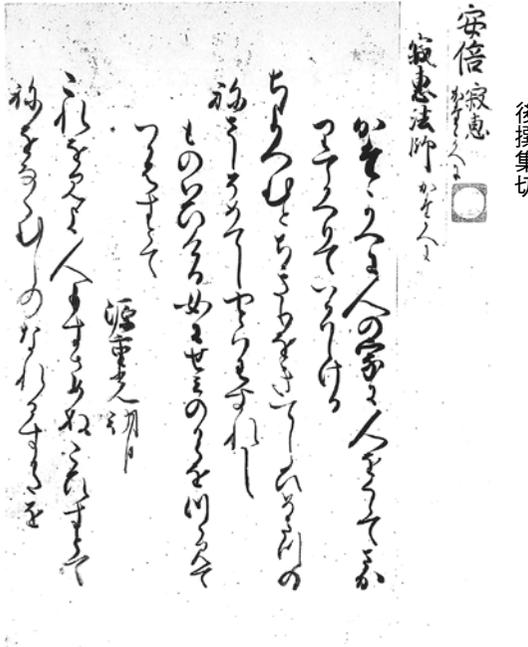
【図版7】 同『拾遺集』 卷第九末（他筆部分）と卷第十卷頭（眞筆部分）



【図版8】 鶴見大学図書館蔵手鑑所収 石見切



【図版9】 金刀比羅宮蔵手鑑『古今筆陳』所収 伝寂恵筆



【図版10】 林原美術館蔵手鑑『日本古筆手鑑』所収 伝寂
惠筆後撰集切

あつたけのやまのつたけのつたけ
 月夜にわが心もよもよもしく
 なるにや 寂
 小南のつたけのつたけのつたけ
 人れいはいけいけい
 寂
 天慶三年春
 六年梅樹

【図版11】 お茶の水女子大学附属図書館蔵 伝寂惠筆金葉
集切

小か陰之行ぢり亦して休む
 につりけい
 周防内侍
 藤原道隆
 宇治赤松の大家言文

【図版12】 天理大学附属天理図書館蔵『古今和歌集』
『和歌の時代』天理ギャラリー より転載

古今和歌集巻第十五
 惠筆
 五条后
 詳煩
 貞観十
 元年
 月廿日
 天徳
 二年
 乙未
 月夜にわが心もよもよもしく
 なるにや 寂
 小南のつたけのつたけのつたけ
 人れいはいけいけい
 寂
 天慶三年春
 六年梅樹